

マイノリティ女性のエンパワメント

2006 マイノリティ女性のエンパワメント・フォーラムを開催して

多原良子(北海道ウタリ協会札幌支部事務局次長)

10月21日、22日、札幌において「2006 マイノリティ女性のエンパワメント・フォーラム」を実施した。この日を迎えるにあたって、さまざまな思いが走馬灯のように頭をよぎり、感慨深いものがあった。2002年に「マイノリティ女性の複合差別」という、新しい概念の言葉が私たちの元に届いてから、早5年が経過していたのだ。これまで「IMADR-JCマイノリティ女性に対する複合差別撤廃プロジェクト」の戦略会議への参加や「アイヌ女性の複合差別問題フォーラム」の開催などを経て、アイヌ女性の差別からの解放という一筋の光を手繰り寄せながら今日を迎えた。

このフォーラムでは、2004年に実施した「マイノリティ女性によるマイノリティ女性のためのアンケート調査」に協力してくれた北海道ウタリ協会釧路、白糠、帯広、登別、苫小牧、鶴川支部の代表女性たち、実態調査を共同実施した部落解放同盟中央女性対策部、アプロ女性実態調査プロジェクト、IMADR-JC事務局そして地元ウタリ協会札幌支部メンバー、合わせて50数名の参加者があった。1日目は、北海道ウタリ協会本部が入っているビルで会議を開催した。会議室の馬蹄形テーブルには、各席にマイクが据え付けられ、大きさに言えば国際会議場の様相を呈している。本州から他団体の活動家を招き、このような設備のある環境での開催を試みた意義は、アイヌ女性自身がかつてない重要な会議を主催し、その場に臨んでいるのだという自覚が大きく芽生えることを期待したところにある。

北海道ウタリ協会副理事長で札幌支部

長でもある阿部ユボが開会の挨拶を述べた。「日本のマイノリティ女性会議がアイヌモシリで開催されることは非常に喜ばしいことであります。今、ウタリ協会は、アイヌ民族の権利回復に向けてさまざまな活動をしています。先住民族の権利に関する国際連合宣言案が国連人権理事会で決議され、この12月にも国連総会で可決する見通しであることから、女性たちも力を合わせマイノリティ女性の複合差別解消にむけた活動に全力を注いでほしい*1」との激励の挨拶であった。フォーラムの総合司会は、2年前に母親とともに札幌支部に入会した女性だった。親子ともども社会の中でさまざまなアイヌ民族差別を受けつづけ、数年間は引きこもりの生活を送っていた。自発的に主催者に電話連絡をくれ、「是非、司会のお手伝いをさせていただきます。このような大事な女性会議に皆さんとともに参加したい」と申し出てくれたのであった。彼女の流暢な進行は「プロの司会者を頼んだの?」と言われるほどすばらしいものであった。

これまでウタリ協会札幌支部が取り組んできた、アイヌ女性の実態調査の内容を報告した。次にゲストである部落解放同盟中央本部の山崎玲子さんより、解放新聞に掲載された部落女性の実態・アンケート調査結果の詳しい報告があった。2003年7月ニューヨーク国連本部で開催された第29会期女性差別撤廃条約・日本政府報告書審査を、日本のマイノリティ女性としてともに傍聴した方である。解放同盟の冊子を委員たちに手渡し必死にロビーイングする姿に触発され、私も「日本の先住民族のアイヌ女性です。アイヌ

女性はたいへん厳しい状況にあります」とアイヌ衣装を着て一緒に活動した事が思い出された。つづいてアプロ女性実態調査プロジェクトから梁優子^{ヤンウジヤ}さんは「在日朝鮮人女性の人権」と題した発表をされた。在日朝鮮人の人数や在日となった理由、どのような法的管理に組み込まれているかということ、自分の体験談を含めて話され、参加者の共感を呼んだ。もう1人のアプロからの参加者^{ヤンエスン}梁愛舜さんは、少し遅れて参加したので初日は自己紹介をされただけだった。翌日に「マイノリティ女性の重層差別」、ホスト社会から生じるエスニックマイノリティへの差別、さらにジェンダー差別の在日女性複合差別について話された。さらにIMADR-JC事務局の原由利子さんは、「実態調査を通じたマイノリティ女性による運動づくり」と題し、1) 出発点は女性たちの思い 2) 追い風は女性差別撤廃委員会審議 3) 試行錯誤の船出 4) 調査の意義 5) 今後の課題と展望と、この数年間の活動をわかり易く報告していただいた。IMADR-JCは、2002年「マイノリティ女性に対する複合差別プロジェクト」に誘ってくれ、現在まで何かと私たちをサポートしてくれた。女性差別撤廃委員会へのNGOレポート作成や支援、現地でのブリーフィングやロビーイングでの原稿の翻訳や通訳、助言と挙げればきりが無い。3団体の実態調査を取りまとめや今日までの歩みには、困難とさまざまな思いの丈があったであろう。

1日目の会議が終了して、留学生会館へ移動し夕食を兼ねた交流会を開いた。宿所からの夕食だけでは味気ないと考え、



エンパワメントフォーラム2日目



札幌市アイヌ文化交流センター(サッポロピリカコタン)の展示

急遽前日3人の女性に「アイヌ料理を作っただけじゃないか？ きっとゲストの方たちは喜んでくれると思う」とお願いしたところ、気持ち良く承諾してくれた。彼女たちが運んでくれた伝統的な料理は、ユック（鹿）肉のお刺身、チポルシト（筋子の団子）、コンプシト（昆布タレの団子）、シケレペラタシケブ（穀物とキハダの実の混ぜ物）、チュブ（鮭）マリネなど、どれも大好評であった。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、自己紹介やフォーラムでは話せないさまざまな思いを夜更けまで語りあった。

2日目の22日は、参加者全員が活動や差別の体験などを発表した。参加者の発言の内容は、「地元支部から参加するよう言われたので参加したが、とても良い会議だと思う」、「しばらく活動していなかったが、このような女性の運動に参加したい」、「このごろ、各地でアイヌ伝統文化の歌や踊りを披露する機会があり、すばらしい文化だと褒められることが多くとても嬉しい」、「今までは、アイヌだけが差別されバカにされてきたと思ってきたが他のマイノリティも同じような経験をして、それを克服する活動をしていると聞き勇気が湧いてきた」などであった。しかし多くの女性は、自身や同胞の過酷な被差別体験を涙ながらに話した。何度聞いても辛く、傷つけられた心の回復は生易しいものではない。話すことで少しずつ溜飲が下がる思いをするようだ。

会議終了後、ウタリ協会札幌支部の拠点となっているサッポロピリカコタンに参加者を案内した。ピリカコタンは、2003年に札幌の表座敷と言われる自然豊かな小金湯温泉にオープンした。外には昔のコタン（村）が再現され、チセ（伝統的な家屋）や熊の飼育檻などがある。館内には復元したアイヌ民具等が展示され、歌や踊りを披露できる交流ホールがある。これらの施設は、参加者にとっても気に入っていた。

「今後1、2年に1度、女性たちが集って経験交流や発表等をしあう場を持ちたい」と今まで何となく思っていたが、さっそく来年の第1回マイノリティ女性フォーラム開催が提案されることになった。今回は、2002年と2003年のフォーラムより大きく成長した姿が伺われた。何より実態調査を自分たちでやりきったという達成感、そして多くのゲストと全道からの仲間たちが参加し、マイノリティ女性の連帯の輪が広がってきた事が実感できた。今まで虐められ蔑まれたことで、自分はダメな人間だと泣いてばかりいたアイヌ女性が、確実にエンパワメントされた。また、今後の目標も立てることができた。ある女性たちは、3月に東京で開催される「マイノリティ女性によるアンケート調査報告会」に「つもり」貯金をして参加すると決意した。またある女性たちは「アイヌ女性の複合差別調査報告書」の冊子に自分の思いを綴りたいと希望している。ま

た、さらに差別や人権問題の学習にも意欲を燃やしている。フチ（アイヌのおばあさん）と言われる年代になったアイヌの女たちが、かつてこのように希望に燃えて活動したことがあったらどうか。複合差別という概念と活動が彼女たちを奮い立たせたのだ。

（たはらりょうこ）

*1 残念ながら、11月28日に、国連総会第3委員会「先住民族の権利に関する国際連合宣言案」が否決され採択が先延ばしにされた。

アイヌ女性 実態調査を終えて

島 直美
（北海道ウタリ協会札幌支部）

アイヌ女性241名を調査対象とした実態調査報告書が、2006年10月21日～22日「2006マイノリティ女性のエンパワメント・フォーラム」（（社）北海道ウタリ協会札幌支部主催）での参加者の手に配布された。この調査をどのように今後反映させるのか？ また、活かしていくべきなのか？ 使途・手段をしっかりと考えていかなければと強く思いました。なぜなら、この会議参加者から趣旨が汲み取れないままに調査に加わり、本当にこ

れでよかったんだろうか、という疑問・声があり実態調査説明担当の1人として考えさせられたからです。調査の目的、経過説明の不備はもちろんですが、今回はじめての経験を踏まえ、次回の調査にあたっては今回の反省を活かし、多くのアイヌ女性の実態調査へつなげることができたらいいなと思いました。今回は第1回目で調査費用に限度もあり、困難なことも多くありました。いわゆる間引制になってしまったことや、各支部の感情移入もあったことも後から情報により知りました。調査の難しさを改めて感じました。しかし、反省すべき点はまますが、この報告書は「アイヌ女性の複合差別」が実態として国へ働きかけができる力になります。

アイヌ女性が長い歴史の中で結婚差別、暴力からの解放と自立がいかに困難だったのか、教育水準、雇用、経済、生活環境などあらゆる面で格差が生じてきたのか、白日のもとにさらされる機会でもあります。しかし、やがて調査で明らかになったことによって、実を結ぶことができたら、アイヌ女性が胸を張って生きることが出来ます。また、現実にはアイヌ女性たちの心には、まだつらい差別が心に重くのしかかっています。とくに女性であれば出産・子育てを通し差別や偏見の壁に突き当たります。子どもたちの未来のために、アイヌであることに誇りを持つるように、しっかりとした調査を再度しなければならぬと考えています。「女性の問題だから男性は関係ない」という問題ではないので、次回は、男性を取り込んで、ともに考え、学習ができれば女性の複合差別を理解してもらえる良い機会でもあります。今回実施した調査は、本来ならば日本国が責任を持ってすべきことであるので、要望をしていきたいと思っています。

(しまぎき なおみ)

マイノリティ女性の 会議を終えて

徳田昭子
(ウタリ協会札幌支部)

ウタリ協会札幌支部で第1回目の会議を開催したときには、マイノリティという言葉さえ知らず、IMADR-JCの協力のもと始めたのが4年前でした。何の訳もわからず、複合的差別を受けているわれわれアイヌ女性は、差別されることをアイヌとして生まれたせいだと諦め、誰もが1度や2度の差別を受けているということを知ったときには、私と同じで「よかった」と思っていました。

最初に仲間と皆で語り合うことからはじめました。想像を越える差別の体験を持つ女性の涙ながらに話す姿に、これを当たり前と思っていた自分の考えが変わり、私と同じ意識のある人を変えるべきだと強く思いました。複合差別やDVの勉強会で学ぼうちに、自分の中の意識が変わっていったことは間違いありません。アイヌ女性実態調査として、各支部からのアンケートに協力してもらえたことは、大きな前進だったと思います。

2006年10月に、ウタリ協会札幌支部主催のマイノリティ女性フォーラムに、部落解放同盟の方や、アプロ女性実態調査プロジェクトの方をお迎えし、他支部の代表の女性に集まっただき、三者共通のつながりを持てたこと、この方々にアイヌ文化にふれていただいたことも大きな自信につながりました。また、アイヌ女性独自の活動に広がりができればと思います。

このフォーラムは、個々の意識革命をし、全道のアイヌ女性や本州にも多くいるアイヌ女性もともに手を取り、この活動を続けていけるよう心新たにさせてくれたいへん有意義な会合だったと思います。

この活動を通して部落解放同盟、アプ

ロ女性実態調査プロジェクトの方々と知り合うことができ、話し合うことができたことは何よりの宝と感謝いたします。

われわれアイヌ女性の意識が変わり民族としてのアイデンティティを確立するためには、これからの女性の力が不可欠ではないでしょうか。女性の力がいかに偉大なのか、この活動をもっと若いときからできたら良かったとの反省から、若い人たちに伝えていけるよう再確認させていただきました。

学歴のない私ですが、一見難しいと思われる活動も私なりの解釈で、泣き寝入りすることはない、すばらしい民族なのだから自信を持って仲間同士手を取り合い、最終的には、アイヌを日本の先住民族として日本政府に認めさせる活動をしたい。そしてアイヌ文化のすばらしさを世界に訴えていくという理想をかかげ、1歩1歩前進して行きたいと思います。

3月の東京での報告会には、アンケート調査に関わった女性1人でも多く参加しようとして今からみんなで積み立て預金をしています。また、笑顔で皆様にお会いできることを楽しみにしながら活動します。

(とくだあきこ)

アンケート調査に たずさわって

川上裕子
(北海道ウタリ協会)

アンケート調査にかかわった1人として、今回の調査は、年代、地域によってアンケートの内容をどれだけ理解していただいて、回答していただいたのか、調査した側にも説明不足な点もあったんじゃないかと反省させられたところもありました。今回は、一部の地域、また一部の人たちしかアンケートが取れませんでしたので、これからもっともっとたくさんの声を聞きたいと思っています。

同じ人間同士がなぜこのさまざまなアンケートを取らなければならないのかと思うと本当に悲しくなります。

今回18歳以上ということで調査しましたが、今なお、子どもたちの中で、差別、いじめがあると言うことを覚えていて欲しい。それを少しでも早く解決し、その問題に取り込んでいくことが、私たち、親の課題ではないかと思います。

このさまざまな貴重なアンケート調査をさせていただき、どんなに大切なことか、身をもって感じさせられました。これからも1人でも多くの人と会い、いろいろな問題に取り組んでいきたいと思っています。自分の体験、そして子どもたちが受けた差別、そしていじめ、親子で泣いた、あの嫌な思いをしたことを忘れないで、これからは、もっと強く生きたいと思いました。

(かわかみ ひろこ)



思いを語る筆者(左から3人目)

自らが調査の主体へ エンパワメントされたマイノリティ女性による、マイノリティ女性のための実態調査

山崎鈴子 (部落解放同盟中央女性対策部)

アイヌ女性の生の声をこれだけたくさんの人から聞いたのは始めてである。私の心を強く打った女性たちの言葉をまず紹介したい。

■現状について

- ・ 民族を隠して生きていかなければならない。
- ・ 他民族の言葉を言語としなければ生きていけない日本社会である。
- ・ 差別をされてきたウタリとかかわらないところで生きてきた。
- ・ なんでアイヌに生まれたと親を恨んだ。
- ・ 子どものころの差別を思い出したくない。
- ・ 毛深いことでいじめられた。
- ・ 子どもが学校で差別され、夫と学校に行き話し合った。夫も職場で差別され、ケンカした。
- ・ 娘の結婚でアイヌ宣言をするかどうか悩みぬいたことを思い出す。

■アイヌとして、アイヌ女性としての

自覚と立ち上がり

- ・ 自分をもっと早く変わっていれば差別されることも美化されることもない。地域の人にわかってほしい。
- ・ 祖父母の悔しき無念さが奮い立たせる。
- ・ アイヌ文化がすばらしいといわれると誇りに思い、喜びを感じる。後輩に伝達したい。
- ・ アイヌに生まれてよかったと思える自分が幸せ。
- ・ 民族(自分たち)への差別だけでなく、他の差別もある。差別と向きあおうという気持ちになっている。
- ・ 学校教育を変える必要がある。親への教育も必要。学校の先生がアイヌについて教育を受けていない。
- ・ 差別の経験は重い。語れなかったことが語れるようになり、同じ痛みを共有できることの大切さ。
- ・ この場所にきて良かったという人が多くうれしい。
- ・ 日本政府は積極的に行動しない。

エンパワメントフォーラムにおいて、

アイヌ女性から聞いた思いの一部を紹介した。差別を差別として自覚し、立ち上がった女たちは自分の思いを率直に語る。今回のエンパワメントフォーラムに参加して改めて感じた点である。今まで調査対象としての存在から調査の主体となり、趣旨を説明し実態調査をともにしていくことは、まさにマイノリティ女性のエンパワメントの過程であることを実感したフォーラムだった。

マイノリティ女性たちは、その属する集団のなかにおいても女性であるということだけで、厳しい差別にさらされている。女性差別を自覚した女性たちはまず、自分の属する集団への差別と女性差別とを対立した関係として捉える。部落の女性でいえば、部落差別をなくすことがまず先決であると考えている。私自身のことでは、1985年ごろまではそのように思っていた。部落差別をなくすことがまず先と見え、女性差別はその次の課題との認識であった。その後、私の問題意識は少しずつ変わり、対立的に捉えるもので

なく、同時に捉えるべきものとして考えなければならないと思うようになってきた。今日では、当たり前のことだが、当時は部落解放同盟や地域のなかで女性差別を課題とするような状況ではなかったのも事実である。

「部落の女性は、部落差別と女性差別の二重の抑圧を受けている」との認識が愛知県連第11回大会（1986年）議案書で方針化されている。愛知において「女性差別」の視点から書かれたはじめての大会方針である。

2003年7月の国連女性差別撤廃委員会の日本政府報告書の審査への傍聴とロビーイング、審査以前に出したカウンターレポートや日本女性差別撤廃条約NGOネットワーク（JNNC）としての行動などが実を結び、女性差別撤廃委員会は日本政府に対して、マイノリティ女性についての情報の欠如を指摘し、次回レポートにおいて、教育・雇用・健康状態・受けている暴力に

関する情報の提供を日本政府に求めた。私は、多原良子さん（北海道ウタリ協会札幌支部）、原由利子さん（IMADR-JC）そして、IMADR-JC複合差別プロジェクトの荒井摂子さん、飯田圭子さんとともにこの女性差別撤廃委員会への傍聴とロビーイングを行なった。その結果、国連の女性差別撤廃委員会からの勧告として結実し、私自身このことによってエンパワメントを実感した。あわせて「人権擁護法案」について人権委員会の独立性についての懸念も示され、バリ原則に沿って設置するよう勧告された。当時、その独立性・実効性を求め取り組んでいただけに

女性差別撤廃委員会の勧告として出されたことは大きな力を得た思いであった。

国や自治体に国連の勧告を追い風としながら、実態調査実施の要求を迫るのももちろんだが、今度は自分たちがどう勧告を活かしていくのかということが、私の問題意識であった。

IMADR-JCとともに実態調査実施に向けてウタリ協会やアプロ女性実態調査プロジェクトのメンバーと会議を重ねていたが、実態調査について具体的にイメージできず、いろいろ迷っていた当時の私の背中を押したのは、ゆのまえ知子さん



筆者

のセクシャル・ハラスメント「1万人アンケート運動」（1989年）とDV全国アンケート調査（1991年）の体験を通したお話であった。日本で初めてのことを行なうのになんで従来の枠で考えなければならぬのか、もっと自由に考え、自分たちの思うように実施したらよいというゆのまえさんの話は、私の迷いを吹っ切るのに十分なものであった。

そのころ私は、名古屋市男女平等参画審議会の公募委員に応募し、審議委員に委嘱された。任期は2002年12月から2004年11月である。

審議会答申項目において、

(27) 少数者女性の実態調査を企画・実施すること

(28) 自助活動への支援を行なうこと

(29) 少数者女性のネットワークの促進

以上3項目を答申した。マイノリティ女性の可視化を答申したのは自治体審議会答申として始めてである。この答申を後押ししたのも、国連女性差別撤廃委員会の日本政府への勧告である*1。

ウタリ協会札幌支部、アプロ女性実態調査プロジェクト、部落解放同盟中央女性対策部の3つのマイノリティ女性グループ

の実態調査は、私が知る限り、日本で初めての調査である。実態調査の方法、共通質問項目についての討議、さらには各グループでの独自の質問項目の作成、実態調査の実施、集計、分析とすべてが初めての経験であり2年あまりの年月を要した一大事業であった。実態調査から見えてきたことを、女性政策の中に活かしていく、たとえば非識字の実態からは識字教室の実

施や継続が当然行なわれなければならないこと、奨学金制度が部落の高校進学率を大きく引き上げた実績から、奨学金制度の充実も政策に反映させていく必要がある。部落解放同盟の中では、女性の実態を男性もともに学習し、共通の課題としていくことも今後の重要な課題である。

（やまざき れいこ）

*1 山崎鈴子「部落差別と女性差別—複合差別の視座」、伊藤智佳子「見えない差別に目を向ける—マイノリティ女性から見た名古屋市男女平等参画審議会答申」『愛知部落解放人権研究会紀要』第2巻。所収。

私たちのアイデンティティ

梁 愛 舜
(アプロ女性実態調査プロジェクト)



筆者（中央）

私は当フォーラムにおいて、在日朝鮮人の1人として、またマイノリティ問題に関心をよせる1人として、貴重なことを学び大きな勇気を得ることができた。フォーラムに参加していた女性たちはいきいきと輝いていた。アイヌ民族の文化を守り担ってきた自信と誇り、家族を支えてきた気骨が会場に伝わっていた。

アイヌの人びとが国家に「統合」され140年が経過した。「統合」後も、アイヌ民族として誇り高く生き、固有の文化を守り伝承してきたのである。日本の社会制度に組み込まれ、当然のように日本人（和人）として社会化を達成しなければならぬ状況下において、アイヌ民族としてのアイデンティティを確立し、アイヌ文化を維持継承するため、幾多の困難を乗り越えてきたことは、よく周知されていることである。

アイデンティティの確立は人にとって重要な問題である。アイデンティティとは自己同一性、帰属意識のことをいうが、私は、自分らしさ、ありのままの自分を受け入れることとも理解している。これが重要なのは、自分が何ものなのかをよく知り、ありのままの自分を受け入れ肯定することなしに、より良い人生を送れるとは言い難いからだ。マイノリティである場合はとくにそうである。社会生活のあらゆる局面で、人権侵害（差別）と立ち向かわなければならないからである。自分自身をよく知り自分に誇りを持ってこそ、立ち向かうことができるのである。

差別に立ち向かうことはたいへん意義

のあることだと思う。なぜなら、私たちの差別に立ち向かう精神は、目の差別にたいしてだけではなく、政治をはじめとする社会のあらゆる矛盾にたいしても黙認しないという精神と共通するからだ。そこには、一個人の問題だけではなく他者の問題も一緒に考えるという優しさが含まれているのである。

アイデンティティ確立のために何が必要か。私はまず学ぶことだと思っている。自分のルーツを知ること、両親の生活史を理解し、自分たちみんなの歴史を知ること、自分たちの言葉を学び、固有の文化を理解し触れることである。そして次にそれを新しい世代へ引き継ぐことである。

しかし、この作業を正規の教育課程とはまったく別に、マイノリティが独自に行なわなければならないため、たいへんな労力と困難がともなうのである。私たちや私たちの新しい世代が、歴史や言葉を学び固有の文化に触れる機会を多く与えられるように、社会的支援を得ること、公的機関に働きかけることは、今後、より必要であると考えている。

アイヌの人びとは、生まれながらに日本国民であり、「日本人」として規定されているが故に、幼いときから両親はじめ家族から教えられていたり、固有の文化といつも触れあっている場合はともかく、知らず知らずに成長した場合、アイヌ民族の一員であるというアイデンティティを確立するまでは、複雑で困難な道のり

があるように思う。

在日朝鮮人は4世・5世の時代に突入しているが、生まれながらにして「外国人」としての扱いを受ける。民族名があり、16歳になれば「外国人登録証」を「交付」されるため、たとえ両親や家族から「私たちは朝鮮人だよ」と教えられなくても、自分自身は何者で、どこからきたのか、ということを考えなければならない時期がかならずやってくる。または、差別を受けてはじめて考える場合もある。そのとき、自分のルーツを知り、歴史を理解することによって、差別を払いのける力を持つことができるのである。やはり学ばなければならない。

在日朝鮮人は、祖先の地から強制的・半強制的に切り離された人びとである。それでも私たちがデラシネ（根無し草）にならず、今日まで「在日」という社会的つながりを維持し、生活を営むことができたのは、自らの歴史を理解し、固有の文化を学び守ってきたからに他ならない。私はこれからも朝鮮人であるというアイデンティティを大切にしていきたい。そして新しい世代に在日朝鮮人社会の歴史や文化を伝えていきたい。アイヌの女性たちが誇りを持って生活し、綿々と伝統的文化を継承している姿から、それが可能であることを学んだ。

(やん えすん)

2006マイノリティ女性の エンパワメント・フォーラムに参加して シスターフッドとマイノリティ女性の エンパワメント

梁 優 子
(アプロ女性実態調査プロジェクト)



筆 者

フォーラム会場で「名刺代わりに。」と
いって差し出された葉書ケース。中を開
けると、アイヌ刺繍を施された衣装の写
真が出てきた。チマチョゴリを着て行っ
てよかったと思った瞬間である。

初めて聞くアイヌの言葉に、ハルモニ
たちが語っていた、音としてしか聞き取
れなかった朝鮮語を思い出し、アイヌ刺
繍の一針に、ボジャギの一針を、むっくり
の弦を見ると、カヤグムの弦を思い浮か
べ、古式舞踊に農楽をイメージしていた。

同化と懸命に戦いながら、伝承し守り
育てられてきた文化、素材にこだわった
手作りの民族料理でもてなす生活の知恵。

エンパワメント・フォーラムが開催さ
れた時間と空間には、「国」という言葉が
なじまない。国民国家の枠組みは、愚かにも
多様な文化を持つ民衆を周縁化した。
しかし、どれほど同化への圧力が厳しく
とも、民衆は固有の文化や言葉を手放す
ことなく守り伝承してきた。フォーラム
の場は、その現実を見事に体現していた。

私がアイヌ文化にふれながらも、その
一方で朝鮮文化を思い浮かべていたのは、
抵抗という思想性において通底したもの
を感じとったからに他ならない。人をも
てなすための細やかな礼儀がちりばめら
れ、心地よさを感じるこののできる場でも
あった。

フォーラムの中で言葉となったアイヌ
女性の語りの断片。「子どもの受けた差別
の悔しさ」「父親の暴力的なふるまい」「銭
湯の利用を拒否された経験」「飲食店を経
営するための果敢な日々」「娘が伝承する
アイヌ刺繍への誇り」「看護師の仕事での
経験」「わが子のみならず、すべての子の
母であろうとする覚悟」…語り尽くせな
い痛みと語られることによって共有され
る解放感、今なお言葉にならない経験が
あった。マイノリティだからといって
引っ込んでいては、生きていけない。自分
たちを踏みにじる、不条理を許しては生
きてはいけない。とはいうものの、マイノ
リティだからといって、簡単に手を結べ

るわけではないことも
互いに知りつくしてい
る。踏みつけられた心
の傷には、すでに癒さ
れた部分があれば、今
もなお疼き続けている
部分もある。そんな痛
みが共振し、涙に変わ
りそうな場面もあっ
た。

振り返って考えてみ
ると、このような出会

いの場を継続していくことは、並大抵の
ことではない。なぜなら、参加者1人1人
が出会うためのお金と時間のやりくりを
覚悟し、家事や仕事の段取りをつけ、時間
を捻出することが問われるからである。
墮落や怠惰に流される日々を送るならば、
出会いを手に入れることは難しいといえ
る。私にとって、このようなエンパワメン
トの場は、日常を生き延びていくための
支えでもある。生きがたい日本社会の中
で易きに流されたくはない。自分を律し
続ける感受性は、豊かなものや確かなも
のにしか裏付けられないものである。政
治にアクセスするツールの乏しい私には、
今の努力が自分たちの生活を少しでも生
きやすいものにしていくことにつなが
るという確信はない。今の努力が実を結
ぶ日がくるのかしらと半信半疑でもある。
それでもあきらめたくはない。なぜなら
「アイヌや部落や在日の女性が出会うこ
と」そのものが人種主義や植民地主義や
家父長性と対峙することになると実感す
るからである。つながることが力を創り
だし、それは自分が優しくなれることだ
と思うからだ。自分が頑張った分だけ、世
界は広がるのが、約束される。

おみやげとしていただいたメノコイナ
ウ。アイヌ民族の女性の「お守り」である。
女性から女性に作ってあげた、相手の憑
き神を励ますものだとされている。メ
ノコイナウを手渡せる女性でありたいと
思った。

(やんうじゃ)



つながりを強めた参加者たち